

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K03421

研究課題名（和文）男性DV被害者の認知行動パターンとその支援の社会的実装に関する研究

研究課題名（英文）Research on cognitive behavioral patterns of male DV victims and social implementation of their support

研究代表者

越智 啓太 (Ochi, Keita)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：40338843

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：公的な統計によれば、デートバイオレンスの被害者は圧倒的に女性が多い。しかし、近年の心理学的な研究では、男性も女性と同程度の攻撃やハラスメントを恋人から受けているというデータが報告されている。この矛盾の原因として、あるハラスメント行為を「バイオレンス」と認知するかどうかの性差の問題がある可能性がある。本論文では、この問題について実証的に明らかにするとともに、この現象の原因について検討した。その結果、女性は男性よりも同じ種類のハラスメント行為について、より不安や恐怖を感じやすいことが示された。また、男性は被害を合理化する傾向があった。この結果について広く関係者に広報するための資料を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、一般に女性が被害者、男性が加害者であるとステレオタイプの認知されるデートバイオレンスについて、男性と女性が同程度の被害に遭っていることを明らかにし、また、公的な統計で女性がより多くの被害を受けているとされてしまい男性の被害が暗数化してしまう原因を、被害認知の性差や通報率の違いより実証的に説明した。もちろん、男性からの身体的暴力の方が命に関わるケースは多いものの、近年のDVは精神的なものが多いため、この問題により焦点をあてるべきだと思われる。そのため、専門家に向けて、この事実を啓蒙するための動画資料を作成した。

研究成果の概要（英文）：Victims of dating violence are overwhelmingly female, according to official statistics. However, recent psychological research has reported data that men are attacked and harassed by their partners to the same extent as women. As a cause of this contradiction, it is possible that there is a gender difference in whether or not a certain act of harassment is recognized as "violence." In this paper, we empirically clarified this problem and examined the cause of this phenomenon. The results showed that women were more likely than men to feel anxiety and fear about the same types of harassment. Men also tended to rationalize the damage. A presentation slides were created to widely publicize the results to interested organizations and parties.

研究分野：臨床心理学、社会心理学

キーワード：デートバイオレンス ハラスメント 恋愛 対人暴力 ドメスティックバイオレンス 被害者支援 プロフェアリング 親密な二者間関係

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

デートバイオレンスとは、交際中のカップル間における暴力のことをさす概念である(本研究では異性間カップルを主に対象として研究を行う)。身体的暴力のみでなく、性的暴力、心理的暴力、経済的暴力なども含み、近年ではむしろ、相手の行動の自由を束縛したり相手の行動を監視する、支配監視系の暴力が中心になってきている。また、「バイオレンス」にまでは至らないが、各種のハラスメント行為などについても同様に問題にされるようになってきている。さて、これらのデートバイオレンスは、男性が加害者、女性が被害者とされて論じられることが多い。実際、配偶者暴力相談センターなどへの来談者も、デートバイオレンスにおける警察事案における被害者も、圧倒的に女性が多い。また、デートバイオレンスについての政府や自治体の調査などにおいても女性の被害率は男性の被害率を大きく上回るのが普通である。

しかしながら、このような状況に対して近年、多くの反論が現れている。女性から男性へのバイオレンスやハラスメントも数多く行われているにもかかわらず、男性側はその行動をバイオレンスあるいはハラスメントと認知しないために相談や刑事事件に結びつかないだけであるというのである。そこで、カップル間において、「あなたは恋人からデートバイオレンスの被害を受けていますか」といった抽象的な質問方法でなく、実際に行われている行為ベース(具体的には「交際相手から、皿などを投げつけられたことがある」や「嫌がっているのに交際相手からポルノやグラビアを見せられたことがある」)を用いて調査を行ったところ、被害率の男女差は消失するか、あるいはむしろ男性のほうが被害に遭っていることが多いことが示された(Archer,2000; Straus,2008)。我々も同様な方法によって調査を行っているがその結果、このような傾向は本邦においても海外と同様に認められることがわかった(越智ら, 2014)

これは、男性がデートバイオレンス・ハラスメントの被害に遭っているにもかかわらず、それを「DVである」と認知していないということを示している。実際、学生相談の場などにおいて、明らかに交際相手からさまざまな心理的な虐待を受けて、振り回され、学業などに大きな影響を受けているにもかかわらず、自らをDV被害者だと認知できていないケースをしばしば目にする(彼らは「俺の彼女はメンヘラなのではないのだから」と合理化しているケースが多い)。このような状況は、男性被害者は、被害者支援のための各種のソーシャルサービスへのアクセス(具体的には、配偶者暴力相談センターや学生相談室、警察、行政窓口等)が制限されてしまっていることを意味しており、かれらのQOLを低下させたままにしてしまう。一方、行政の側もデートバイオレンスの男性被害者に対する支援という視点をなかなか持てずにいるのが現状である。実際には男性のDV被害は女性のものとはさまざまに異なった特徴を持っているにもかかわらず、それらの点について認識できているとはいえず、その根拠となる実証的なデータも不足しているのが現状である。

2. 研究の目的

そこで、本研究では改めてDV被害に性差があるのかを確認するとともに、さまざまなバイオレンス行為について、それを「バイオレンス」だと認知するかに性差が存在するのか、そして、とくに女性の方が男性よりも同じ行為でも「被害」と感じやすいかどうかについて調査することにした。

また、デートバイオレンス認知を規定している要因について、探索的に調査することを試みる。被害者がさまざまなタイプのバイオレンス行為を受けたときに、恐怖や不快感を生じると思われるが、この感覚が強い場合にはその行為を「バイオレンス」だと認知し、それほど強くない場合には「バイオレンス」だと認知しない可能性がある。一般に、男性のほうが女性よりも力強い場合が多いので、女性から男性へのバイオレンス行為は、男性から女性へのバイオレンス行為に比べて被害者にこれらの感情を生じさせにくい可能性がある。これは、男性の「バイオレンス」の過小評価をつくりだし、バイオレンス認知、そして、公的な統計の違いを作り出している可能性がある。そこで、各種の具体的なデートバイオレンス行為について、それを受けたときにどの程度「不快」を感じるか、「恐怖」を感じるかについて評定させ、これとデートバイオレンス認知の関係を明らかにしようと思う。

最後に、ある行為を「バイオレンス」であると認知する閾値が低い場合、自分が交際中の相手との間でより、自分は「(デートバイオレンスの)被害」を受けたと認知し、申告しやすくなるのかについて調査してみたいと思う。

3. 研究の方法

調査参加者と手続き：あらかじめ調査会社のデータベースに登録されている調査協力候補者の中から、現在異性と交際している全国の18歳~29歳までの未婚の男女を対象に実験参加者を募集した。コロナ下の第1調査、その後の第2、第3調査においてのべ2500名程度の参加者からのデータを得ることが出来たが、とくに男性の実験参加者を集めるのが困難であり、とくに第3調査においては、女性は予定通りの参加者が集まったが、男性は期限までに約半数しか集められなかった。しかし、すべての調査を通じて、十分な数のデータを得ることが出来た。調査の実施に先立って、調査に関する概要説明、データの使用方法、途中撤回が可能であることなどについての説明文書を呈示し、調査対象となることに同意したもののみに対して調査を行った。調査

はいずれも(株)クロス・マーケティングに委託して行った。また、法政大学心理学専攻・心理学科倫理審査委員会の承認を得て調査を行った。回答に要する時間は、おおむね5~10分程度であった。なお、調査票の末尾にはデートバイオレンスについての公的相談窓口の連絡先についての情報を掲載した。

質問紙の構成：3回の調査では、異なった質問が行われたが、共通していたのは、調査協力者の年齢、性別、交際期間、そしてDVについての項目であった。第1、第2調査では実際のDVの被害状況、第3調査ではDV被害認知についての質問が行われた。第1、第2調査では、越智他(2015)の改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度を構成する35種類の行動記述を示して、自分がその被害を受けたことがあるかについて、評定させる形で行った。第3調査ではそのような行為を受けた場合、それをDVであると認知するかどうかについて評定させた

この尺度は、身体的暴力、間接的暴力、性的暴力、言語的暴力、支配監視系暴力、経済的暴力、つきまとい・ストーキングの7個の下位尺度から構成されており、それぞれ具体的なデートバイオレンス・ハラスメントを示す5つの項目からなっている。評定尺度としては、それぞれの項目について、第1、第2調査では「そのような行為を全く受けたことがない(1)」~「そのような行為をよく受けている(5)」までの五段階評定、第3調査では、それぞれの行為について、それがDVだと「まったく思わない(1)」~「どちらでもない(4)」~「非常に思う(7)」の7段階評定で解答させた。また、同じ35項目について、そのような行為を受けた場合、あなたは「どの程度不快に思いますか」、「どの程度、恐怖を感じますか」について7段階で評定させた。評定尺度は、不快認知については、「まったく不快に思わない(1)」~「どちらでもない(4)」~「非常に不快に思う(7)」、恐怖認知については、「まったく恐怖を感じない(1)」~「どちらでもない(4)」~「非常に恐怖を感じる(7)」であった。

4. 研究成果

第1,第2調査で予想通り、男性は女性と同程度かそれ以上のデートバイオレンスの被害を受けていることが確認された(とくに第1調査では、コロナ感染症における緊急事態宣言下のデータにおいて、このような結果が確認された。)しかし、その認知や通報率は女性よりも低かった。この原因について第3調査で詳しく検討した。以下、第3調査の結果について述べる。

調査参加者の基本的な属性とその性差:分析対象者の平均年齢は、男性24.71歳(標準偏差3.05)、女性24.67歳(2.93)であった。交際期間は、男性26.69ヶ月(24.10)、女性26.44ヶ月(24.29)であった。

バイオレンス認知における性差:35項目の評定結果を7種類のデートバイオレンス・ハラスメント尺度の下位尺度ごとに合計し、その得点について性差があるかについてt検定で分析した。すべての尺度について有意な性差は認められなかった。

不快感における性差:7種類のデートバイオレンス・ハラスメント尺度について、不快感得点に性差があるかt検定で分析した。すべての尺度について有意な性差が認められ、女性の方が男性よりも同じ行為からより強い不快感を感じていることが示された。

恐怖における性差:7種類のデートバイオレンス・ハラスメント尺度について、恐怖得点に性差があるかt検定で分析した。すべての尺度について有意な性差が認められ、女性の方が男性よりも同じ行為からより強い恐怖を感じていることが示された。

バイオレンス認知と自己被害の申告の関連:自分が現在、デートバイオレンスの被害を受けているかについての評定について分析を行った。この質問に「はい」と答えたのは、14人(男性6人、女性8人)であり、全体の2.4%に過ぎなかった。次に、被害を受けていないもの(576人)と被害者の間で、「バイオレンス」認知の得点に差があるかを調べた。すべての項目で有意な差はみられなかった。また、被害を受けているかどうかとバイオレンス認知得点の相関を算出したが、すべての尺度で有意な相関は見られなかった。次に不快、恐怖尺度についてやはり、被害を受けていないものと被害を受けているもので差があるかについて探索的な事後分析を行った。t検定の結果、不快感では、身体的暴力、間接的暴力、言語的暴力、性的暴力、ストーキングで、恐怖感では、身体的暴力、支配監視、言語的暴力、性的暴力、ストーキングで有意な差が見られた。ただし、この差はいずれも、被害を受けていると申告したもののほうが、不快感や恐怖感が少ないという結果であった。これは、仮説とは逆の方向性であった。このような結果が得られた背景には、実際の被害者が自分の被害を過小評価したり、合理化したりするバイアスが存在するのかもしれない。

男性DV被害者の分類:第1、第2調査の結果を基にして、男性被害者の反応パターンの類似性について多次元尺度構成法をもちいて空間上にマッピングした。その結果、身体的な虐待を含むものと含まないもの、含まないものについては、心理的な虐待の程度が大きいものと小さいものという合計3つのサブグループに分類されることがわかった。それぞれのタイプごとに年齢などの属性に差はなかった。

男性DVに対する啓蒙プレゼンテーションの作成:以上の結果を踏まえて、配偶者暴力相談センターや各種ハラスメント施設向けの啓蒙動画を作成した。また、この動画について、実際の相談業に関わっている相談員から意見を聴取しつつ、改良を行った。この動画は今後、公開する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 越智啓太	4. 巻 82
2. 論文標題 新型コロナパンデミック状況下における恋愛関係とデートバイオレンス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法政大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 越智啓太
2. 発表標題 DV相談における記憶心理学と臨床心理学
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------